

●誌上教材研究 その2

小学校教師による、小4社会科「県内の特色ある地域」の教材研究—1枚の写真を通して

北山杉の悲鳴が聞こえる！

作成：梅原伸雄（京都府園部町立園部小学校 教諭）

寸評：山下宏文（京都教育大学 教授）*

授業で子どもたちに、こんな写真を見せながら（写真）、こんなふうに語って（語り）、森林の何かを伝えたい（意図）。日々学校で林業や森林について授業を实践されている先生方にもこのコーナー（ほぼ隔月掲載を予定）にご登場いただこうと思います。併載する山下先生（社会科教育学がご専門）の寸評でみるこの「誌上教材研究」は、教育系の方々、林業系の皆さん、そして、NPO活動を熱心に展開されている皆さんの参考になるとと思います。（普及部編集室／吉田 功）

「竹のように弓なりに曲がった北山杉。30年もの長い間、手間ひまと愛情をかけて育ててきた杉が、雪の重みに耐えきれず（この雪は水分を多く含むためにとっても重いのです）、たった一晩で、このような姿に変わってしまいました。1991年2月19日のことです。今までにも何度か大きな被害を受けたことはありますが、このときの被害が最も大きいそうです。

どれぐらいの木が倒れたと思いますか？67万本の木が倒れたといわれています。そのころ、1年間に出荷された北山杉は約12万本ですから、被害がどれほど大きなものかがよくわかりますね。

では、なぜこれほど大きな被害がでたのでしょうか。皮肉なことに、まっすぐにすらりと天に伸びる北山杉の特徴が、逆に弱点となってしまったのです。北山杉は、長さ7m以上で直径12cm前後を



◀雪害林分（中田 治さん撮影）

目標に細く長く育て、さらに枝打ちをして上のほうにしか枝や葉を残さないため、降り積もった雪の重みに弱いのです。

もしあなたが、この山の持ち主で、北山杉を育ててきた林業家だとしたら、このような姿を目にして、何を考えどう思いますか？」

○意図（梅原）：「北山丸太」は600年の歴史を刻んでいる。自然や地形の条件を生かすとともに、親から子へ、子から孫へとたゆまない努力と英知によって伝統が受け継がれ、今日に至っているのである。写真の杉も、20～40年もの長い年月の間、多くの知恵と愛情を込めて育てられてきたものである。それが一晩にして無残な姿になってしまうという厳しい現実。この現実を児童に伝えるとともに、それでも「北山丸太をつくる仕事を続ける」という林業家の思いに直接触れることを通して、伝統的な産業を守り継承させていこうとする北山の人々の思いや願いを共感的に理解させることをねらう。

○寸評（山下）：小学校の第4学年社会科では、「産業や地形条件から見て県（都、道、府）内の特色ある地域の人々の生活」を扱うことになっている。わが国の国土の3/4が山地であることを考慮するならば、山地にある地域の人々の生活にはぜひ目を向けたいところである。そして、山村の人々の生活と生業（林業）が自然を守り育てる営みと深く結びついていることに気付かせたい。この雪害の写真を契機として林業家の思いに迫っていこうとする試みは高く評価できる。

* 〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 TEL.075-644-8219（直通） E-mail: mountain@kyokyo-u.ac.jp